

南三陸町 つながる 未来通信

No.3



このニュースレターは、
南三陸町の方々が様々な仮設住宅やまちで取り組まれている
元気の出る活動を紹介し、
これからの暮らしづくり・まちづくりに向けて、
皆さんがこのまちで大切にしていきたいと思っていることを
私たちに発見し、綴りたいと思っています。

発行元：NPO法人コレクティブハウジング社

各仮設住宅では、集会所を活用していろいろな営みが生まれています。
一緒にご飯を作って食べたり、昔の暮らしや言葉を思い出したり、ほかの人のつくった手仕事作品
から創作意欲が刺激されたり！これからのまちや暮らしについての話も、少しずつ聞こえてきまし
た。今回はそのなかから、いくつかの場面をご紹介します！

共に考える

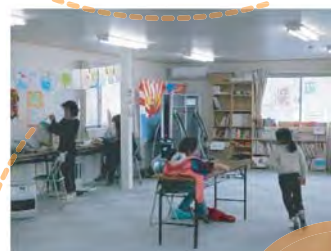


壁に貼った言葉や写真を
きっかけに、暮らしの物
語がひろがります。写真
を見ながら語り部をし
たり、これからのまちの風
景を語り合うこともある
そうです。

共に食べる



集会所の大きな台所で、
みなさんにご飯の支度。
「鰯汁うめーな」「この
お漬物どうやって作った
の？」とにぎやかな食卓
です。



共に遊ぶ

集会所の一角では、子ども
たちが集まって遊んでいま
した。「ポップコーン食
べる？」と大人が声をかけ
るシーンも。

共につくる

それぞれの集会所から生まれる作品は
実にさまざま。南方町では、作業を分
担してあっという間に枕を完成させる
早業にびっくり！平成の森では、作っ
た作品を見せ合って、「これいいわ
ね」と枝の情報交換もあるそうです。



共に刺激しあい楽しんで
自分が元気になる

(川上英里)

南三陸へ愛をこめて

南三陸町まちづくりの目標に共感しつつ思うこと

南三陸町の復興計画の目標の一つ“自然と共生するまちづくり”にはこのように書かれています。「私たちは山々に守られた海から多大な恩恵を授かってこの地に住み続けてきました。しかし、その自然は時に猛威をふるって私たちを苦しめます。私たちは、自然へ畏怖畏敬の念を忘れることなく風土・文化を後世に継承し、この豊穡の海と山からの恵みに感謝しながら、自然と共生するまちづくりをすすめます」。

3月11日、その日のことは尋常ではなかったと承知しつつも、海や新緑の山だけを見ると、その美しさに何事もなかったかのような錯覚を覚えます。そして「自然の猛威を忘れてはいけない」という思いをいっそう強くします。

これまで、数々の出会いに恵まれ、皆さんからエネルギーをいただきながら活動を続けてきました。そしてたくさんの意見を伺い暮らしを拝見し、時に専門家の意見に耳を傾けてきました。今、率直に抱いている感想は、目標に共感すると同時に、仮設暮らしをする住民の意思が総合的にみて行政に届いていないなということです。

南三陸町の高台移転の計画案も拝見し、多くの意見も聞きつつ思うこと

28の集落地区がそれぞれに重ねられた長い歴史や文化、ご先祖たちの知恵、「家」のしきたりや個性的な「家例」（かれい）、「講」や「結」…薄っぺらな勉強で恐縮ですが、素人ながら考えますに、自然との共生、人と人との関係を気持ちよく果たすためのしくみや暮らしの知恵がここにはあったのでありましよう。そのことはみなさんが「コモン・で・しごと」で“手づくるもの”にも表現されています。

そんな歴史や風土に思いをはせつつ、災害から命を守ろうと提案された「高台移転」素案を拝見すると、コンパクトにまとめようとしすぎていることや、旧来の団地づくりがベースにあるような印象をうけます。まちは多様な要素の集積ですから、団地的発想ではうまくいきません。

率直に申しますと、素案には「私たちは、自然へ畏怖畏敬の念を忘れることなく風土・文化を後世に継承し、この豊穡の海と山からの恵みに感謝しながら、自然と共生するまちづくりをすすめます」という目標にそったまちの姿、ヴィジョンがなかなか見えません。

仮設住宅でお話を伺いますと、提案に対してまだまだ納得のいかない意見をたくさん聞きます。それは、まちづくりのヴィジョンが、まだ町民みんなで共有できていないからであろうかと思います。

南三陸町は「復興まちづくり協議会」の活用を呼びかけています

南三陸町のホームページ内の「防災集団移転促進事業」に対するQ&Aには、20項目をこえる内容が掲載されています。国や県からは見えにくい地域の問題をどのように解いて、新しいまちを創り再生させていくか。それぞれの立場からの問いかけは、今後の具体策を考えるためにとても参考になることです。

また、広報『南三陸』4月号では“復興に向かって”と題して「復興まちづくり協議会」の活用を呼びかけています。抜粋しますと「これからみなさんが直面する高所移転は、あらたな地域のコミュニティを形成しながら、共感しあえるまちづくりを進めるために、行政、町民、町にかかわるあらゆる人々や団体の総

力を結集して取り組もう」とのこと。皆さんで、新しいまちのヴィジョンを共有していくプロセスが重要であると南三陸町が思っているからこそその呼びかけです。すばらしい考え方です。

“郷土愛”のある老若男女が共生できるいいまちにしたい、そのためには、すこし遠回りのような気がしても、意見をかわし、多くの気づきを総合化していくことが“まち”の再生に欠かせないことだと思います。

「自然へ畏怖畏敬の念を忘れることなく風土・文化を後世に継承」という視点は、持続可能な社会を創っていくことであり、また生きてチャンスをあたえられた私たちの使命でしょう。

今後も、皆さんの納得いく意見交流をベースに復興に向かっていくことを希求します。そのときは私たちNPOコレクティブハウジング社の経験と知見が役立つときもきっとあると考えています。

社会の変化を共通認識にしつつ長期的展望をもって創再生を

超高齢社会・人口減少・少子化、低成長や資源の有限性などの難問をどう解決するかは、日本のどの地域にも共通の課題です。南三陸町にあっても、これからの家族の在り方、住まいの在り方や暮らし方なども、長期的な展望に立って、発想の転換が求められる時代に入ってきたと思います。

たとえば、多世代家族で広い住まいに住み慣れてきた方々からすれば“狭い”と思う住まいでも、共有のコモンスペースをもったり、作業を共同化することで、持続可能性を高めることができそうです。またコンパクトシティやコレクティブタウンなどの考え方を参考に、暮らしを支えるまちのあり方を検討することも大切です。海も山のような限られた資源を限られた陣容で育て続ける、新たなしくみづくりも必要でしょう。

いわば、これまでの枠組みをもう一度見つめなおし、新たなしくみをつくっていく時期だという認識が、大切であろうかと思います。自己負担の重い社会への変容に対して、自助・共助・公助の連携でいかに乗り切っていくか、地域人として長期的展望を創出したいものです。

神戸の教訓は「急がばまわれ」です。

先日、神戸のまちづくりに尽力した専門家たちの話を、地域の方々と一緒に聞くことができました。彼らのホームページから抜粋して参考にしたいと思います。

「阪神・淡路大震災直後、未曾有の災害によって神戸は10年前の水準まで落ち込んだという見方が広く流布した。そして、この遅れを取り戻すために道路・港湾の復旧や全半壊の解体戸数に見合う住宅建設が、復興計画の重点施策とされた。しかし、この見方は盾の一面を見落としている。この大震災によって、神戸は突然10年後の世界に投げ出され、否応なしに高齢化、空洞化、膨大な福祉負担などの課題に直面することになった。今われわれが取り組んでいる問題は、まさに近い将来わが国の社会が解決を迫られる問題を先取りするものである。被災地で生まれた、21世紀の社会を切り開く鍵になるかもしれない」

阪神大震災から17年余。外見上は再生したかに見える神戸ではありますが、ハード系を優先させた後遺症がまちの活性化を妨げています。南三陸町は「急がば回れ」という教訓を受けとめて、21世紀から22世紀をも見据え、人を育て、海や山を育て、こぶりながらきらりとひかる安心快適なまちを創生することが、人々の真の福輿になるのだと思います。そして、南三陸の方々のさわやかな感性がきっとそれを成し遂げるであろうと信じています。

（渡邊喜代美）

復興てらこや

参加させていただきました

in平成の森

阪神淡路大震災の復興まちづくりに尽力された都市計画・建築・まちづくりの専門家の方々のお話を伺いました。当初はばたばたのなか分からなかったことも、震災から10年経ち、15年経ちと、その都度振り返りをするなかで分かってきたそうです。その経験をもとに、これから皆さんの復興まちづくりにとって重要なポイントを分かりやすくお話ししました。以下、そのポイントをまとめましたので、参考になさってください。

●今、自分がどこにいるのか常に把握しよう。

行政の対応がこれから加速していくため、今の段階でできることを準備しておくことが大切だそうです。

●自治会長は、年交代にせず継続的に担うことをお勧めします。

復興は土地の権利を扱うため地主の話し合いになる。通常の自治会の仕事とは異なり継続性がないとうまくいかない。

●いろいろな情報が出揃うまで待ち、その上で冷静に腑に落ちるようにしていこう。

4月～5月にかけて情報がどっと出てくるので、それをきっちり受け止める。

●世帯主だけでなく、女性や若い人に参加してもらおう。個人個人の意見が大切です。

話しやすいもの同士で話し、全体の場に持ち込むやり方もある。また、会合には夫婦で参加してもらうというのも良い。

●急がば回れ！

議論が十分煮詰まるまで先に進まないで繰り返し話し合おう。

●最後は一人ずつの意向確認を！

一人ひとり事情が異なるため、最後は第三者が収入も含め一人ずつヒアリングすべし。

●みんなで将来の夢をつくっていこう。

希望が見えないと元気を失う。住民同士で話しをして将来像をつくるのがよい。

まだまだお伝えしたい内容がたくさんありますので、次回に続きをお知らせいたします！

(狩野三枝)

仮設図書館

アリーナ横の仮設図書館では、移動図書館「たんぼぼ号」のペイントが始まりました！職員の方とアイデアを出し合い、松原公園のモアイとSLを描くことに。「まだ途中段階なのですが、この線が繋がりをもって、明るい色が生み出されるようがんばりたいです。みなさん楽しみにしていて下さい。」と、ペインティングチームもはりきってお手伝いさせていただいています。

(小林更来紗、初田雄一)



笑顔のモアイ像、見えますか？

発行日：2012年4月18日
発行：NPOコレクティブハウジング社
〒101-0054東京都千代田区神田錦町3-21
ちよだプラットフォームスクウェア1175
info@chc.or.jp / 電話：03-3315-0255

CHC南三陸支援チーム
大橋徹平、狩野三枝、川上英里、渡邊喜代美

CHCでは、この活動のために2つの助成金をいただいています。

平成23年度（第2次）独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業
事業名：仮設から始めるコミュニティづくり支援事業

赤い羽根「災害ボランティア・NPO活動サポート募金」助成事業（第4次中長期活動）
活動名：仮設住宅や被災地域での孤立化を防ぎ、共に日常の暮らしを取り戻すための手仕事を柱にしたコミュニティの再構築の支援活動